

# 狐娘とイルカ娘のお便秘小説誌



オトワタリ

ウララ  
ユキ

— 成人向け —  
**R18**  
ADULT ONLY  
18歳未満  
購入・閲覧禁止

狐娘とイルカ娘のお便秘小説誌  
「オトワタリ・ウラノユメ」体験版

目次

第一話：オトワタリ ……6

狐娘、パンパン便秘腹、お腹マッサージ、放屁我慢、便意我慢、容器排泄

第二話：ウラノユメ ……14

イルカ娘、パンパン便秘腹、便意我慢、放屁、水中排泄

奥付 ……21

小説： 灰屋ちゃん

表紙： かびはやすくる

口絵： かびはやすくる はやん

挿絵： かびはやすくる はやん

オトワタリ

く狐娘がバレバレ放屁欲求を我慢して限界排泄する話

序

雪は柵田を下に隠して、真冬の遅い日の出を待っている。集落を見下ろす小高い丘の上から少女は白い息を吐いて、それから小さく声を出した。

声は少女の近くでふわりと歪み、そのまま一面に響き渡る。

薄い色の空に吸われそうな、寂しく美しい音が広がっていくのを少女は最後まで聞き届けると、集落へと続く下駄の足跡を辿り始めた。

一 十一月の柵田

「へえ、見事なもんだ。柵田か」

外套の襟をたてて首をすくめたまま、昨夜の初雪でまだぬかるんでいる街道を歩いていた男は、はあっと息を吐いた。

柵田を見上げながら懐から煙草を出し、火をつける。

初冬の夕暮れ。刈り跡の残る誰もいない柵田が薄く延ばされた赤に照らされている。

枯草色だけの殺風景な柵田は夕焼けに色を上乗せされて、余計に寂しさを感ぜさせた。

「この里はたしかヒトハズレがいるはずだな」

無意識にヒトハズレのことを考えてしまうのはもはや職業病だろう。

「たしかこのあたりは……」

背のうから本を取り出そうとして思い出す。

「オトワタリ——音を遠くまで伝えるヒトハズレか……」

◇

この世の山、浦、川、池。ありとあらゆる場所にはヌシがいる。

稀に、そのヌシに好かれる人間がいる。好かれた人間は人と異なることができるようになり、そして人という枠から「外れる」。

そうした人だったモノをヒトハズレと呼ぶ。

男はそんなヒトハズレを診ることを生業とする旅医者なのだった。

ヒトハズレのことを思いながらぼうっと柵田のほうを見ていると、

柵田の下から登ってくる影があった。

黄昏の中に浮かぶその影には、人にはない耳と尻尾が見える。

「人ではないな。ヒトハズレだろうか」

煙草をふかしながら、何とは無しに見ていると、ふいに気になる音が耳に入ってきた。

草笛に息を吹きつけようとして失敗したような音。水の枯れた水路や枯葉色の斜面。その音はまるで、柵田そのものが震えるかのように周りのあらゆるものから聞こえてくる。

旅医者はその音に圧倒され、その場に立ちすくんだ。畦道の中にたえず影もびたつと動きを止めた。

音は、空気が抜けるような音に変わり、やがてやんだ。あとには、元の黄昏の寂しい田の上を渡る風の音だけになった。

動けないでいる男の眼に影が映る。耳のついた小さい影が集落のほうへ柵田を駆けあがっていった。

「なんだったんだ……」

金縛りにかかっていたように動けなくなっていた旅医者はつぶやいた。

タバコを潰して、懐中時計を取り出す。

「もうこんな時間か。急がないと汽車に乗り遅れちまう」

そうひとりごとちると、旅医者は懐に時計をしまい、町へと続く道を歩きはじめた。

## 二 狐娘ムニホ

二月、旅医者は件の柵田の里に向かって歩いていった。

雪の白と木々の黒だけの道を歩いていると視界が開け、雪の階段が姿を現した。柵田が雪に埋もれているのだ。

「雪の柵田もいいもんだな」

春がそう遠くないことを感じさせる白い太陽が雪を被った柵田に反射して眼にしみる。夕暮れが近いというのに、太陽光の強さはもうすぐ三月になろうとしているのを強く意識させた。旅医者は、帽子を

深く被りなおして、道を急いだ。

「旅医者さま、遠いところをわざわざすみません」

「いえ」

里の長老の出迎えに旅医者は頭をさげた。

「旅医者さまに診てほしいのは、里のヒトハズレ、ムニホさまのことです」

ゆるやかな斜面に点々と張り付いている屋敷や小屋の前の道歩き。日差しのせいか雪道の表面がざらついていた。

「あの子、いえ、あのかたはお加減がよくないようです」

「よくない、というところ？」

旅医者は聞き返した。

「ええ。近頃は目の下にクマが出来ていることが多く、どこか覇気がなくて。お屋敷にこもられることも多くなってしまってます」

「へえ、それはまた、穏やかじゃないな。ムニホさまはそのことについて何か」

長老は首を振る。

「いえ。我々がどこかお加減が悪いのかと申し上げても、悪くなどない、というばかりで」

「ヒトハズレの力が弱まる様子は何？ 音を届けることができなくなったとか。ヒトハズレの力は波があって、不安定になることが時折ある」

「いや、弱まっているということはないです。子供が体調を崩し、鹿狩りの最中の父を呼び戻そうと声を届けてくださったときがありま

したが、その時のお声はむしろいつもよりはつきりしていたくらいでした。ムニホさまの声はいつも聞きほれるような声ですが、その時ばかりはあまりに大きいから耳の奥が痛くなりそうだったので覚えていません」

旅医者は腕を組んで「なるほど、ではヌシの力が弱まっているわけではないのか」とつぶやいた。

「とにかく診てみないと」

「よろしく頼みます。もし、ムニホさまのお体にもしものことがあれば、里の者は皆悲しみます」

長老と話しているうちに、集落の一番奥にたどり着いた。

黒い木立がまばらに生える山肌が里を呑み込むちょうど境界線——小さな屋敷の前に二人は着いた。

「これがムニホさまの屋敷です」

長老が屋敷の呼び鈴を鳴らす。

「ムニホさま、ムニホさま。旅医者さまがいらつしやいましたよ」

返事はない。

「すいません、旅医者さま。ムニホさまはいらつしやるとは思うのですが……少し待ってほしい」

ヒトハズレの子は出てこない。

屋敷のほうばかり見ているのもなんだか気まずくて、屋敷と反対側——集落と柵田を見下ろせる方向へ顔を向けた。

「しかし、立派な柵田ですな。これほどの柵田。一朝一夕でできるものではないでしょう」

旅医者は煙を吐く。

「ははは。嬉しいお言葉です」

長老は後ろ手を組んだ。

「この柵田はみなへの誇りなのです。ムニホさまがヒトハズレとなつてからはムニホさまとこの里の人間とが作つてきた」

「ムニホさまと？」

「ムニホさまの声はよく響く。水路の異常、熊や猪が出たこと、子供の怪我、そういったことをすぐに伝えてくれる。だから、みな安心して田に出られんです。うちの柵田はムニホさまと作り上げたのと同じだ。ムニホさまはうちの里にとって大切な存在ですよ」

長老の言葉を心の内で繰り返して、柵田にもう一度視線を向ける。柵田のきらきらした白の上を赤みを帯び始めた日の光が斜めから射す。柵田の凹凸がそのまま青い陰と淡い赤に色付けられている。

「ワシになんの用じゃ？」

柵田を見下ろしていた二人の耳に入ったのは可愛らしい声だった。

屋敷の裏のほうから不機嫌そうな少女が姿を見せる。

木綿の着物の上に、丹前を羽織つた少女。着物の足元から覗く、華奢なふくらはぎは、足首、くるぶしへと緩やかにつながる。下駄の鼻緒が少女の小さな足の指にぐっと掴まれていた。

肩にかかるまでのゆるりと柔らかな長い髪はところどころすすきのようにきらきらと跳ねている。根元は狐を思わせる明るい色で毛先に向かって暗い色になっていく。そして、頭の上ではその髪の毛の中から大きい耳が伸びて、髪の毛をふわりと除けていた。

小さな牙の生えた口はへの字に曲げられ、茶色の双眸が長いまつ毛

の裏側から不機嫌そうににらみつけてくる。

ヌシの狐に好かれて、ヒトハズレとなった「オトワタリ」——萩彼ムニホは眉間に皺をよせていた。

「なんじゃ！ 無駄に急かしおって」

狐娘が張り上げた声が耳にびりびりと響いて思わず旅医者は片目をつむつた。

苛立っているのか尻尾がピンと立って丹前の裾を持ちあげている。

「ムニホ様、お客様をお連れしました。旅医者様です」

「旅医者？」

「ムニホ様が近頃お屋敷にこもられているので、どこか悪いのかと……」

ムニホは目を逸らす。

「ワシは、その、どこも悪くなどない！ 余計なことをしおって……」

帽子をとり、旅医者は頭を下げた。

「流れの医者をやっております」

「おぬし、どこかでみたことあるのう？」

少女は下からのぞき込んでくる。

「そういえば、初雪のころ、この辺りを通ったことがありましたな」

「へえ、初雪のころ……」

びくんとムニホの狐耳が動いた。

ムニホの顔がみるみる赤くなっていく。

「ムニホさま？ どうしました？」

「知らん！ 医者なんて要らぬ！ ワシは家を出ないぞ！ 出てい

け！」

狐娘は旅医者を追い出そうと両手で一生懸命押し出そうとした。た。

「ムニホさま！」

里の長老がたしなめようとするが、ムニホは小さい足で踏ん張って頑なに押し返そうとする。旅医者はふと、何かに気付いたというようにムニホの手を取った。

人形の手かと思まがうような小さい指は氷柱に触れた時のように冷たい。その指先の桜色の爪の根元をしげしげと見つめる。肌と爪の境目には小さな手に似合わない乾いた半透明の皮膚の断片がいくつも突き出ていた。

「何をする！」

「いや、やけにささくれが多いなと思つてな」

少女は旅医者の手を振り解いて、再び旅医者の体を押し出そうと小柄な体躯に懸命に力を入れる。下駄が庭石の表面をガリガリと引つ掻いた。

「うるさい！ 出ていけ！ 出て行けつてば」

唾を飛ばしながら激昂する少女を前に二人はあえなく退散するほかなかった。



「すいません。ムニホさまの虫の居所が悪かったようで」

狐娘の屋敷をあとしながら、里の長老は旅医者に頭を下げた。

「いや。ヒトハズレたちは体も心の状態も不安定なことが多い。診察させてくれないことは珍しくない。しかし、話を聞けないとなると……」

「無理なのでしようか」

長老は心配そうに旅医者を伺う。

「まあ、方法はないことはないかと。ムニホさまの屋敷の近く、どこでもいいので部屋を貸していただきたい。ムニホさまはしばらく遠くから診させてもらうことにします」

「わかりました。用意させましょう」

長老が部屋の手配を命じに呼び出した小間使いと話している間、旅医者は考えを巡らせていた。

耳が痛くなるほどの声。屋敷に籠るようになった。初雪の日に対する反応。そして、初雪の日聞いた音。

それらを頭の中で反芻し考え込んでいるうちに、ふと旅医者の頭の中にはある憶測が浮かんできた。

### 三 裏庭の廁

夕暮れ時。

西の黒い山の上の雲が色づき薄く伸ばされて消えてしまいうるころ、ムニホの屋敷——裏庭に面した縁側に兩戸の裏から周りを伺う小さな影があった。

耳を立てて、周囲を警戒しながら抱えていた下駄を雪の上にそっと降ろす。それから、下駄に左右のつま先を通し、足音を立てずに裏庭

のある場所を目指す。裏庭の一角。隠れるように立っているのは小用と大用に分けられた二つの廁。少女は左右を見て誰も見ていないことを確認すると、大用の戸を開いて、後ろ手で戸を閉めた。

(もう夕暮れじゃ。皆は朝に備えて家の中じやろうから聞こえないはず)

少女は自分に言い聞かせるように心の内でそうひとりごちた。そのまま小さな尻を突き出す。尻尾が持ち上がった。

ぶすつ。ぶすつ。ぷしゅうううつ。

よく聞かないと分からない空気の抜けるようなごく小さな音。それから、熱が着物の生地にも広がって、それから廁の闇に溶けていく。

(うう、危なく外で尻を出してしまうところだった)

ムニホは険しい顔で帯の下、下腹を擦った。皮膚の下の張り出した内臓をこする。

(腹に尻が溜まっておる。一昨日はせっかく出せそうだったのに。あやつらが来たせいで……)

少女は恨めしうに胸中で吹きながらもう一度尻を突き出した。

ぶすつ。ぶつ。

少女の尻穴から少しずつ熱が噴き出ていく。

ぶすうううつ。

——ぶつ。

ムニホの耳がびくつとはねて、毛が立った。少女の尻が放った音は小さな廁の中で反響する。

(うう……。尻の音が響く)

それから、可愛らしい顔を歪ませる。  
 (くさい……。通じがしばらくないから匂いがきついのだ。いい加減出さぬと……)

◇

狐耳とふわふわの尻尾。可愛らしい姿の少女はその腹の中に溜め込んだものに悩まされていた。外気に冷やされた柔らかな皮膚と熱を放つ小さい体。誰もが抱きしめたくなくなるような小動物のような容姿の奥、内臓に溜め込んだ塊と気体が人知れず彼女を苦しめていた。

——冬の初めにとある理由で変えた習慣。それがもたらした代償に  
 はじめ、ムニホは気づいていなかった。

小さな変化に気付いたのは習慣を変えてから八日目の朝のこと。長老の使いからいつも届けられる朝食を食べた後、皿を洗おうとしていたムニホは、「ひゃっ」と声を出して、手を水から引っこめた。指に水が沁みる。まじまじと指を見つめると爪の根元が薄く剥け、ささくれになっていた。

「ささくれ……」

これまでにできたことのない小さな指の上のめくれた皮膚をまじまじと見つめながら、ムニホはささくれができた理由を考えていた。寝不足、食事。頭に思い浮かべては否定することを繰り返しているうちに、ふと少女はあることに思い当たった。

「そういえば、昨日も一昨日も三日前も通じがないのう」

一日通じがないことは珍しいことではなかったが、もう丸三日目排便していない。不快な症状は一度気が付いてしまうとあとは嫌でも意識された。

頭の後ろが重い。尻が腹に溜まる。ささくれが増える。まぶたの裏が濁ってなかなか眠れない。せつかく眠りに落ちても腹の張りで目覚めてしまう。

不快な症状から解放されたのは、それから四日目の夜中だった。重く張り詰めた腹の中を塊が降りてくる感覚で目を覚まし、雪の降る中厠を目指す。小さい体を震わせながら、いきみ続けること四十分。コロコロした便を大量に産み落とし、やっと腹が楽になったのだった。

それ以降、ムニホは便秘を繰り返すようになった。  
 とにかく便が出ない。そもそも大便を催すことが稀になってしまった。暗い中外の厠に行っても出ない。尻が溜まって腹が張る。食欲がなくなる。

夜中にやっと思意が降りてきて必死にいきんで、ゴツゴツした塊を汗だくになりながら小さい体から必死に出す。

もちろん、ムニホも手をこまねいていたわけではない。里にやってきた葉売りから入手した通じ薬を試したこともあった。けれども、便は出ない。便秘はどんどん悪化していき、二月になってからムニホは一度も腹に溜まった便を出せていなかった。

◇

しばらく何かを待つようにじっと体をこわばらせたあと、ムニホはもう一度お腹をさする。

「降りてきた……か？」

着物をまくりあげ、裾をつかむ。穴の上で尻をむき出しにして、狐娘は唇を噛みしめた。

ぶっ。ふすっ。

少し紅潮した少女の唇の間から「んっ」という声が漏れるのと乾いた音が尻から噴き出るのは同時だった。せまく、暗く、寒い——憂鬱なものが詰め込まれた廁にそっと吐き出された音は増幅され、耳から入ってくる。

ムニホは顔をしかめる。それから、目をぎゅつとつぶって、薄い腹肉に力をこめた。

「んっ」

ふすっ。

「むっ」

ぶっ。

「んんっ」

ぶぶううう！

尻尾をぴんと立てて、体を震わせながら、いきむ狐娘。けれども、腹の中のもののは出る気配がない。

（はああ。もう、全然出ぬ！ さつきから尻がくさいし、最悪じゃ）  
苛立たしげにムニホは足を広げた。下駄についた雪がずりずりと引きずられて床板の上に跡がつく。

（このっ。絶対出してやるのじゃっ）

少女は唇を噛み締めて、こぶしに力をこめる。腿を震わせる。裾についた雪が一筋の水になってくるぶしの後ろをつたっていく。

「んっ」

小さく声が漏れた。

ぶっ。ふすっ。ふすうううううっ。

音が響く。小さい尻穴から熱が噴き出る感覚に尻尾が持ち上がる。

「んううううっ」

ムニホが顔を真っ赤にしてお腹に力を入れた瞬間だった。

ぶううううっ！ ぶっ。ぶびい！

小さい尻肉を振るわせて下品な音が噴き出した。

放屁音がせまい廁の中に反響する。ムニホは耳鳴りがしたのか顔をゆがませたが、またすぐに腹に力を入れた。

「この！ さつきと出ろ！」

そう毒づいて狐娘はなおも腹に力を込める。

ぶっ。ぶううううっ。

それでも、少女の腹は溜まった気体を吐き出すだけだった。

どれくらい時間が経っただろう。床上の雪は何度も引きずられ水になっていった。はあ、とため息をついて、少女は立ち上がろうとして、ふらりとよろけた。長時間の戦いですっかり足がしびれてしまったのだ。くずれた着物をなおして、廁の戸を開ける。

青い冷気が鼻をつまんで、耳を噛む。腹の中の匂いを吸い込むことを繰り返した鼻腔が寒さで麻痺していく。廁に入ったときはまだ明るかった山の上ももうすっかり暗くなっていた。上空は風が強いらしく

輪郭のおぼつかない雲がちぎられながら月の前を通り過ぎていく。すっきり夜になるまでずっと廁にいたのに、欠片すら出せなかった。やるせない事実を思い知らされるようで狐娘は月に向かってため息をついた。

(オトワタリの体験版はここまでです)

ウラノユメ

「イルカ娘がカチカチ便秘を出そうと必死にいきむ話」

一 お告げ

フィリは目を覚ました。晩春のだるいほど長い日が障子越しに注いでいる。

全身にまとわりつく倦怠感に顔をしかめて、まだ慣れない豪華な調度品に囲まれた小部屋の壁紙を十数秒見つめてから、体を引きずらず障子を開いた。

フィリのいる屋敷の離れは海を見降ろす場所に立っている。少女は肘をついてつまらなそうに窓枠に切り取られた入り江を見つめていた。

フィリは入り江の穏やかな海面の上を渡ってきた風を浴びるのが好きだった。今は近づくことさえできない海から吹いてくる風がフィリの心を慰めてくれる。海から吹いてくる桃色の髪が揺れた。

「フィリさま」

玄関のほうから声がした。誰かの訪問にフィリと呼ばれた少女は慌てて寝巻きから着替え、客間へ向かった。尾ひれを畳の上で引きずり、細い腕に力を入れて、椅子の上に体を載せる。西日が当たっていた椅子はぬるくて余計に倦怠感を煽った。

「フィリさま、お加減はいかがですか」

初老の男二人が恭しくフィリに頭を下げる。網元の使いだ。

「フィリさまのおかげで今日も大漁でした」

フィリは華美な屏風の前で作り笑顔を浮かべる。

「フィリさまのおかげです。おっしゃる通りの場所に網をしかけるだけでこんなにイワシが獲れるなんて」

「これもフィリさまがヌシさまに気に入られたからです」

「この夢乃浦のヌシさまはイルカの姿をしていると言われてます。フィリさまのお姿はまさにヌシそのもの。ヌシさまに好かれている証拠ですよ」

そう言われて少女は自分の足のほうにちらりと目をやった。

大きな尾ひれ。それに向かって伸びる紺色の体はつるつるした茄子のような感触の皮膚に包まれている。フィリの腰骨から下はイルカの下半身の姿形。夢乃浦に伝わるというヌシと同じイルカの姿だ。

——二か月前、ヒトだったフィリは「ヒト」ではなくなっていた。

この世の山、浦、川、池。ありとあらゆる場所にはヌシがいる。

稀に、そのヌシに好かれる人間がいる。好かれた人間は人と異なることができるようになり、人という枠から「外れる」。

そうした人だったモノをヒトハズレと呼ぶ。

フィリはそんな「ヒトハズレ」の少女だった。

報告に来た使いたちはフィリのことをひとしきりほめそやした後、ちらりと二人で目配せをしてこう切り出した。

「それで……お休みになったときに夢はご覧になりましたでしょうか？」

機嫌をとるかのような低姿勢が却って嫌な気持ちになる。今までフ

イリたちにつらく当たってきたくせに。

「桑が崎の先です。夫婦岩から少し行つたところでしょうか。イワシをたくさん載せた船の姿を見ました」

そう言うとき使いたちは目を輝かせた。

「ありがとうございます。フイリさまも風邪など引かぬようお休みください」

挨拶をいうが早いか二人は離れから去っていった。

フイリは、はあつとため息をついた。使いたちは結局夢の内容にしか興味がないのだ。

フイリは布団の上に寝ころんだ。

「疲れた。家に帰りたい」

思わず弱音が口をついた。

十一日前の朝、目が覚めたらイルカの尾ひれが生えていたフイリ。

それからヒトハズレとして祀り上げられるまではあつという間だった。次の日の晩には、網元の御殿の離れに豪華な調度品とともに押し込められていた。それからは食事と風呂以外、網元の使いに眠っている間にみる夢の内容を離すだけの生活。息が詰まりそうだった。フイリの肉親はおらず、助けを求められる人はいなかった。

集落の傾斜地の一番奥、集落と海とを見下ろすように立つという網元の御殿の立地も、生まれ育った浦の目の前の小屋から引きはがされるようで残酷だと思った。

それに。

フイリはそつと腰をあげた。

フイリの下半身、腹側についている溝には、肛門と産道、尿道が収納されている。その溝がわずかに広がって、肛門が膨らんでいく。

ぶしゅうううつ。

そつと力を抜くと空気の抜けるような音とともにガスが噴き出した。

尻穴の熱い感覚がなくなると、すぐに濃い匂いがのぼってきた。匂いがきつい理由は自分が一番知っている。

「くさい……。こんなにくさいの、絶対便秘だからだよね」

フイリは帯の上から腹の膨らみを確かめるように撫でる。帯が少女の腹に押し付けられ、膨らんだ腸の形が浮かび上がる。

何度も張った腹をさすっていると、こぼこぼとお腹が鳴った。ガスか便か分からないけれどお腹の張る感覚が、お尻のほうへと降りてくる。

「お腹、ちよつと動いてきたかも。今日こそいい加減出さないと」

フイリはずるずると下半身を引きずって、離れの端の小さな一室に入った。板間敷のその部屋には真ん中に窪みがあり、木箱のおまるが嵌めてある。イルカの下半身のために歩けないフイリは、ここに排便と排便をすることになっていた。

イルカの体の溝が木箱の上にあるのを確認して、フイリはお腹に力を込めた。

「んっ」

ブウウウウ！

息み声と同時に乾いた放屁音が響いた。ガスが溜まっていたらしい。

「んんっ」

可愛らしい声を漏らすフィリ。フィリの溝に隠れていた穴が口をぐいっと開く。中ものを出そうとつるつるの皮膚を押し割って穴の周りが膨れ上がる。

フィリは期待に胸を膨らませながら、さらに力を入れる。

「んっ」

ぶっ。ぶすっ。ぶううっ。

穴からガスが吐き出される。

一生懸命力を入れたのに、出るのはガスばかり。肝心の便は出てくれない。

フィリはずりずりと体を引きずって姿勢を変えた。力の入りやすい姿勢を探して、体を揺らし、十一日間前には無かった下半身の奥に力を入れる。

「ふんっ」

フィリは小さい唇を噛み締めて、腹に詰まったものを出そうとする。可愛らしい細い髪の毛を汗で湿らせ、小さいこぶしをぎゅっと握る。

尾びれがブルブルと震えている。

フィリは頭の中から尻尾の先まで全身で便を押し出そうとしていた。

ぶううううっ。ブッ。ぶっびいいいいい。

放屁音がむなしく響いた。顔を真っ赤にしていきんだのに、ひとかけらも出ない。

「いい加減、出てよ……」

そう言いながら帯の上から重い腹をさする。腹の奥に重い塊が張り

付いている。

「このままずっと、出なかったら、お腹どうなっちゃうんだろ……」

不安が押し寄せてきて、フィリは慌てて頭を振った。

「シビツダが来る前に、前にもうちちょっと頑張らないと」

フィリはもう一度腹に力を入れた。

フィリが不安になっている理由は便秘のひどさにあった。

イルカは本来便秘とは無縁だ。海の中で泳ぎながら排泄できるような水に溶ける便を排泄するのだ。だから、本来イルカが便秘になることはない。

けれども、フィリは重度の便秘だった。十一日間一度も出せていない。フィリがヒトハズレになってから食べたものはすべてその腹の中に溜め込まれていた。

## 二 お風呂

十五分後、結局フィリはひと欠片も出すことができずに座敷に戻ってきた。畳の上で腹を引きずると腸が揺れて溜まった中身まで揺すられるようだった。

ため息をついていると、玄関の戸がトントンとたたかれた。

「フィリ、風呂が沸いたぞ」

うん、と返事をする間もなく戸が開かれた。日焼けした少年が荷車を引いたまま土間に入ってきた。

「行くぞ」

少年はフィリをせかす。

「待つてよ、シビツダ。準備してないから」

フィリは手ぬぐいや着替えを風呂敷にまとめて、ふすまを開いて玄関に向かう。フィリを抱えて荷車に乗せると、シビツダは離れの裏手に向かって歩き始めた。

石垣の切れ目から斜面を降りたところが風呂の小屋になっている。急勾配を降りるために、少年は体の向きを変えた。フィリが乗っている台を手で押さえながら、後ろ歩きで慎重に降りていく。

「あつたかくなつてきたね。もうすぐ北前船も通るかな」

フィリはシビツダにつぶやいた。

「昨日、遠くのほうに見たな。そろそろ何隻かうちの浦にも寄るかもしれないな」

「わたしも見に行きたい。シビツダ。北前船が寄ったら教えてよ。櫛が欲しいの」

「網元に言ったらもらえるんじゃないか」

「え、そうかもしれないけど。自分で買いたい。あ。それかシビツダが買ってくれてもいいよ」

「買わないぞ」

へへ、とフィリは笑った。

「ね、来たら教えてよ」

「もし寄つたらな。着いたぞ」

離れより二回りくらい小さい小屋の前で、シビツダはそう言った。戸を開けてフィリを脱衣所のすのこの上にフィリを降ろした。風呂小屋には湯船と洗い場、そして、すのこを敷いた小さな脱衣所がついて

いた。

「じゃあな」

少年は風呂場の小屋の周りをぐるりと回った。

湯船の近くには明かり取り用に開けられた隙間がある。そしてその下には手前に突き出すように風呂釜があった。ここで火を焚いて小屋の中の湯を沸かすのだ。

シビツダは息を吸い込んで竹筒を口にくわえると火に向かって息を吹いた。

フィリとシビツダは所謂、幼馴染だった。浦の目の前の家と言うには狭すぎる小屋の隣同士で育った。小さいときは一緒に浦で一緒に遊び、魚を干してきた。

フィリがイルカの姿になり風呂へ連れていく必要ができたとき、風呂焚きの役を任されたのはシビツダだった。

「単に皆がやりたがらないから。親方衆が万全で漁に出られないと困るから下っ端の俺が押し付けられたんだ」

フィリに役に決まったことを報告しにきたときシビツダはそう言った。足元を見ると、シビツダは新しい下駄をおろしていた。

フィリは体を洗って、湯船に体を沈めた。

「はあ」

息をつく。廁で何度もいきんでかいた汗が湯に溶けていく。明かり取りから降りてくる風が心地よく顔に当たると、湯船に体を浸している時間はフィリの数少ない楽しみとなっていた。

湯船の中で尾ひれをそつと動かす。尾ひれの先まで熱と意識が通っていくようで心地いい。しかし、その心地いい時間も長くは続かなかった。

こぼこぼこぼつ。

腹の中を降りてくる感覚とともに尻の裏側が膨らんでいく。

ガスが降りてきたのだ。

(また、おならしたくなってきた)

フィリは昨日も風呂に入っている間に放屁したくなつたのを思い出した。

(最近お風呂入るとすぐおならしたくなっちゃう……)

心の中でそうひとりごちて、フィリはきゅつと尻穴を締める。風呂場の明かり取りの隙間のすぐ外には、シビツダがいる。フィリは年頃の少女。姿が見えないとはいえ、間近に異性がいる状況で放屁はしたくない。しばらく我慢していれば放屁欲も収まらないだろうか。そう期待を込めて、ガス放出を我慢しながら、フィリは自分の体を見下ろした。

脱衣所の棚の上に置かれた行燈の灯が水面下の少女の胴体を照らしている。

少女の薄い体。鎖骨との下とあばら骨のへこみの陰の中で、しがみつくように張り付いた微細な泡がきらきらと光る。泡の張り付くしなやかな皮膚の形作る流線形。その曲面はあばら骨の一番下を過ぎて急激に前へと突き出る。

下腹がへそをてっぺんに膨れている。皮膚が白く引き延ばされ、へそが斜め上を向く。内圧で膨れ上がった引き延ばされた皮膚に泡は張

り付くことができずに、ただへその穴のくぼみにしがみついて、へその穴の奥で妖しく映っている。

天井から滴が落ちてさざ波が立った。水面の凹凸が生んだ光の濃淡が下腹を撫でていく。

——フィリの腹はパンパンに膨らんでいた。

ぐおおおつ。

我慢したガスが腸液の中でぐるりとかき混ぜられて音を立てる。フィリの中で急速に膨満感が増していく。フィリは湯船の中に深く体を沈めて、お尻を手で押さえた。

フィリの便がぎちぎちに詰まったイルカの大腸の中。便が腐敗し腸液の中でぼこぼこ生じたガスの気泡は集まりながら、大腸の中を上へと伸び、やがて上半身の腸管へと溜まっていく。

海獣の太い腸の中で腐敗して生まれた大量のガス。少女の細い胴体はその大量のガスを注入される。人間の少女の大腸が普通であれば入れられることのない量のガスがイルカの内臓から昇ってきて腹が膨らんでいく。

少女は我慢しようとするけれども、どんどん放屁欲求が高まっていく。海獣の腸内ガスを少女が腹のうちに抱えて我慢し続けられるはずもなかった。

溝を手で押さえようとしているのに、溝が開いて隠れていた尻穴が管のように伸びる。

ぼこつ。

お湯の中にこぶし大の泡を吐き出された。水面ではちんと弾けると、

濃い匂いが鼻を刺した。匂いが風呂場の湯気と一緒に風呂場の明かり取りの隙間から昇っていく。フィリはすぐ外の少年の気づかれることを恐れて赤くなった。

(わたしのおなら、やつぱりすごくくさいっ)

くるるるっ。ぼぼぼぼぼ。

腹が鳴る。ガスが降りてきて、下腹がどうしようもなく張っていく。

(我慢しなきゃっ。これ以上おならしたらバレちゃうっ)

フィリはお腹に力を入れないように背中を反らす。お尻の裏側、直腸が膨らんでいく感覚を止めるように溝にぎゅっど手のひらを押した。

(がまんっ。がまんっ。がまんっ)

ぼごっ。ぼごぼごっ。

続けざまに泡が噴き出した。大きな泡が湯の中に放り出される。フィリの腸内から送られてきた泡は水面で弾けて、風呂のもやに混ざっていく。

(だめっ。全然我慢できないっ)

ぐおおおっ。

フィリに追い打ちをかけるように腹が鳴った。ガスが降りてくる。

(また、だ。我慢しないといけないのに……)

腹の底の膨満感が膨らんでいく。溝は押さえているはずなのに、ぐいっと力がかかって尻穴が膨らむとどうしようもなかった。

(お腹張って、もう、無理)

ぼごっ。ぼごりっ。

海獣の肛門が腸内ガスを吐き出す。

イルカの腹の中の太い腸管の太さをそのまま押し出したかのような大きさの泡が次々と水中で踊った。放屁が止まらない。自分の大腸が溜まったガスを追い出そうとしているようだ。風呂場の中には温泉のように濃い匂いが充満しはじめていた。

ぐうううううっ。

腹が鳴る。背中からぞわりと波が上がってきて尾ひれが水中でびくりと動いた。お尻の裏側にぐいっと思考が引き寄せられる。尻穴の裏が硬いもの押し広げられるような感覚と一緒に直腸が膨らんでいく。(……ウンチしたくなってきたかも)

フィリは便意を感じ始めたのだ。

(お腹が動いてきたのはうれしいけど……)

そこまで考えて、フィリは明かり取りの隙間から出ていく湯気を目で追った。湯気に向こう、風呂焚きをしているシビツダに声をかけようとして、躊躇する。

(今、あがろうとしたら、厠に行きたいって知られちゃうよね)

フィリが離れにある厠に行くには、荷車を押ししてもらわなければならない。湯船に入っただけで風呂からあがって離れへ戻ろうとしたら、催したことが分かってしまうのではないかとフィリは危惧したのだ。

時間を稼ごうと腹を撫でながら、尾ひれで湯船の床を擦る。

ぎゅるるっ。ぐううう。きゅうううっ。

沈黙していた腸が元気に水中で音を立てる。

(だめだ、ウンチしたいの、全然収まらない……)

尾ひれが湯船の床に押し当てられる。

ぐるぐるとお湯の中で思考が巡る。

(なんでお風呂入ってる時に行きたくなるの！ さつきは出なかつたくせに)

フィリは間の悪い自分の腹を呪いながら、なおもフィリは考えた。この便意を逃したらまた出せなくなるかもしれない。そうなるとまたこの重い腹を抱えたままになってしまう。一度も出せていない。このままだと病気になるってしまうかもしれない。

フィリは勇気を振り絞った。

「シビツダ、荷車お願い。風呂あがるから」

「あがるの早くないか？ あたたまるまで入ったほうがいいぞ」

「いいから、早く。のぼせたんだってば」

シビツダをせかして、湯船から這いずりだした。

体を拭くのもそこそこに急いで浴衣を羽織る。拭き残して濡れたままの肌に浴衣が張り付いて気持ち悪い。ガスで膨らんだ下腹に帯を回す。腹が締め付けられて苦しくて帯を緩めた。

風呂場の小屋の入り口を開いて、フィリは少年が荷車を引きずって歩いてくるのを待つ。

風呂の中であんなにガスを吐き出したはずなのに、ガスで膨れた腹が帯の裏側で膨らんでいた。

(ウラノユメの体験版はここまでです)

狐娘とイルカ娘のお便秘小説誌

## 「オトワタリ・ウラノユメ」

[小説] 灰屋ちゃん  
[イラスト] はやん かびはやすくる

2024年4月28日 書籍版第一刷発行

2024年4月28日 電子版第一刷発行

発行者：灰屋ちゃん／サークル「灰色屋敷灯」

連絡先：yamori8ihiro@gmail.com

印刷所：

頒布価格／時価

私的利用として許容される範疇を超えて、無断で本書の一部または全部を複製・複写・転載することは禁止いたします。

上記に違反した場合、損害賠償金として金 50,000 円を請求します。